

瀋陽の警官は笑顔と共に

「アリガトウ」と言った



花街（隠居） 澁谷 繁樹

二〇一三年六月七日正午ごろ、大連に向けて時速三〇〇^キ以上で突っ走る中国高速鉄道の二等席で駅弁をかつ喰らいながら、瀋陽（日本統治時代は奉天）の交通警察官から笑顔とともにかけられた「アリガトウ」の言葉も噛みしめていた。

瀋陽に入ったのは、六月三日の午後七時半、緯度の高い中国平野をしつこくついてきた夕日も流石に退場して、瀋陽北駅は薄い闇に包まれていた。市街地に入ってから沿線も営みの明かりが少なかった。十月に日本で言う

国民体育大会の主会場となるから競技場の新設などに電力を振り向けているのだろうと思いつながら、影絵で揺れる人の波を泳いでタクシー乗り場の列に並ぶ。

反日デモに高速鉄道の派手な事故。日本から見ると、悪印象が強い最近の瀋陽だが、本当に日本人が気楽には歩けない街になってしまったのか、考えていたら、中国の知り合いから、日本の人は今の中国にどんな視線を投げかけているのか、教えてほしい、瀋陽の現状を把握してもらってから話し合わないか、と誘いが来た。

中国はビザなし訪問で、最長二週間は滞在できる。旨い饅頭（マントウ・一次発酵で止める大きな蒸しパン）がある大連も旅程に入れ、五月二八日に福岡から大連に入った。六〇〇万人都市の街はどこもかしこも高層ビルの建築中だった。提供された寢床は、中心も

中心、街の真ん真ん中の四二階建て、窓の下には建設中の地下鉄、見上げると大連で一番高くなる九二階建てのビル建築現場で、既に七〇階を超える高さに聳えていた。

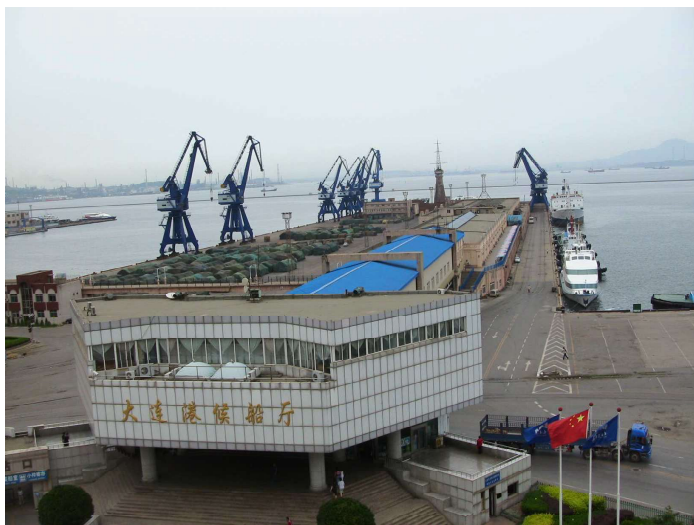
朝、午前五時過ぎ、歩いて一〇分ぐらいの露天朝市に顔を出す。饅頭屋には、もう、行列ができています。餡子入りもあるけれど、目当ては具なしで一個一元（一六円）、巨漢。プロレスラーの握りこぶし二つ分になりそうな大きさで、一〇個買ってバッグに入れ背負うと、肩にズシリと来る。荔枝（ライチ）も日本で冷凍物になじんだ舌に衝撃が走るほど、生は、水が甘さと妖艶さをまといながら結晶した逸物で、楊貴妃の好物という故事に領きたくなる。

大連は再訪になる。祖父が南満州鉄道勤務父はハルビン中学校の最後の卒業生だった。中央大学で学徒召集された父を除き、祖父、

祖母、叔母の三人が、大連の港から日本に引き揚げています。引き揚げ船が出航した大連港第三埠頭が改修工事を取り壊されると聞いて、二〇〇七年に訪れ、掌を合わせてきた。今や大連の港は世界一の規模を誇る貨物旅客港に変貌しようとしている。



朝の六時には行列ができる大連の饅頭屋さん



六年前に撮影した大連港の第三埠頭。日本への引き揚げ船が旅立った埠頭も今はない



例外なくブツ飛ばす車の流れに身を投じて
婦人警官が交通整理

○七年の旅は運転手さん付きの車で移動したので、今度の旅で初めて大連のタクシーを利用した。怖い、怖い、第一、乗れない。相乗りが許されているため、複数の客なんか拾おうともしない。四人連れが乗ろうとすると、一人が止める役、あと三人は物陰に隠れる。首尾よく止めたら、物陰から後部座席に飛び込む。運転手の大声での文句、盛大な舌打ちを無視して行き先を告げる。行き交う車は、ベンツ、アウディ、フォルクスワーゲン、レクサスと高級車だらけなのに、タクシーはオンボロ、車内も汚れ放題、運転手さんも車に負けないくらいになりで、助手席に座ると、体臭を我慢する羽目になる。

人口八〇〇万人を超える瀋陽ではタクシーの相乗りは許されていなかった。車両も運転手さんも大連よりタチが良かった。同じ遼寧省の省都が瀋陽で第二の都会が大連、おん

なじ制度にすりや良さそうなものだけでも、大連の日本通の若者に言わせると「大連はシヤカシヤカ、瀋陽はオットリ。大阪と京都、でしようかね」。成る程ね。薄闇に包まれた瀋陽北駅、タクシーに乗る番が回ってきた。

整理と監視役の警察官が「リーベンレン（日本人）？」と、笑顔を浮かべながら聞いてきた。「ええ」と日本語でこたええると、「アリガトウ」とさらに目がほころんだ笑いと日本語が返ってきた。餃子の発祥地・瀋陽の開業一〇〇年以上の餃子店、行列が出来ていたのでウマイカモと踏んで店に入り、ダンナと煙草をやりとりするくらい仲良くなかった肉饅屋、柳条湖事件に端を発した満州事変を日本の侵略を忘れてなるまいぞとの展示品で溢れている9・18記念館、煙草屋の長い茶髪の新エチャン、どこでも誰にも、あからさまな敵対の目には出会わなかった。「一度に四

人も乗せたら、ほかの客が拾えないじゃないか。オレはどうやって生活するんだ」と大連のタクシーの運転手さんからブツブツ言われたのが、敵視と言えば敵視になるかなくらいだったし、同じ大連のタクシーでも「妹がヨコハマで働いていてね。ニホンはいい国だつて聞いているよ。尖閣のケンカなんざ政府に任しときゃいいさ」ってな日中友好劇もあったりした。「新聞とテレビは切り取り方が一面的だからな」と実際に歩き回った感想を述べたら、「アナタは新聞記者じゃなかったんですか」と、中国の知人から足をすくわれてしまった。

旅の最終盤で中国富豪の一人から超高級海鮮料理店に呼ばれた。話し合っていたら、彼の人物の御祖父も満鉄勤めとわかり、乾杯また乾杯。杯を重ねるにつれ、つつい漢詩を披露したら、彼は即座にスマートフォンを

取り出してインターネットでチョチョイのノチョイ、おお、今のは長恨歌ですね、スンバラシイと、普段は忙しくて酒を飲む暇がないという人が深酒に溺れる夜となった。中国でも指折りの書家になにか書いてもらいますからと頻りに呟いていたから、そのうち、掛け軸が送られてくるかもしれない。

瀋陽から帰る高速鉄道の最高速度は、時速三〇六キロだった。一五〇元の最高級駅弁の中身は、牛の煮込み、豚の炒め、胡瓜と唐辛子の醤油漬、カップスープもついていて、広すぎて飛ぶように流れるとはいかない車窓だと速度は感じないし、駅弁のスープもさざ波も立ってない。「さつきバイキングの朝食をあれだけ食べたばっかしなのに、ホテルが倒産するくらい詰め込んでるのに、よく入りますね」と同行者にあきらめながら、だっておいしいんですから、これで煙草が吸えりや



かなりイケタ中国駅弁。カップスープには「ワカメ玉子スープ」と日本語もついていた。

言うこたないんですがねと弁解していたら、乗務員や鉄道警察官がバタバタと前の車両に走っていく。どうやら完全禁煙の列車内のトイレで一服つけた輩がいたらしい。道でもどこでも吸い放題なのに、決めたとなつたら、警察まで動員して取り締まる。そういや、ひっくり返った傷を持つ高鉄だった、神経質に気を遣うのも当然か、あの警官の笑顔もアリガトウも国家歴史文化名城指定の瀋陽だから当たり前なのかもなと駅弁の後口を度数の少ない青島ビールで洗いながした。

(NIE—教育に新聞を—鹿児島研究会事務局長)

